

「孝」の観念を取り戻そう

親は民主主義の敵か

私の大学時代だから、もう五十年も昔になる。ある日の家政学の講義で、女性教授が「家庭の目的は、それを構成する家族一人ひとりの幸福にある」と語った。当たり前の話なのだが、それにしても、彼女の物言いには妙に力がこもっている。誰かが家族の中であって、一人ひとりの幸福を破壊しているのだとする気負いが、発言の背後に感じられた。

この傾向は、今日の高等学校の家庭科にも引き継がれている。淡々と授業が展開されるのではなく、常に何者かが家族を圧迫しようとしている。家庭科はこれらの不当な圧力と戦わねばならぬという「悲壮感」に溢れている。

戦前の父親といえども、決して「家族の敵」だったわけではない。赤貧（せきひん）洗うような貧しさの中でも、父は、家族にひもじい思いをさせまいと必死であった。母が、我が身以上に家族に尽くしたことは言うまでもない。厳しさの中で、ひしと身を寄せ合い、いたわり合って生きていたのが、戦前のごく普通の家族だったのである。

まして今日、我が子を見捨てて自分の利益のみを考えたり、子を搾取の手段としたりするような親はどこにもいない。それなのに家政学や家庭科は、どうして今も「家庭の民主化」のため、これほどに張り切ってしまうのであろうか。

アメリカ占領軍による伝統文化の全面否定

大東亜戦争開始直前、アジア、アフリカのほとんどすべては白人列強の庶民地であった。例えばスマトラ島を支配していたのはオランダであった。スマトラ島北端の港町バンダ・アチェには十六歳から住んでいたある老人から直接聞いたが、ここでのオランダの支配は、残忍きわまりないものであった。男子の多くが性病で鼻骨が露出したまま労働に携わっていても、衛生教育ひとつしなかった。様々な毒虫に刺されて化膿し、人々が血や膿を流して働いていても、薬一つ与えなかった。その一方、オランダ人だけは完璧に衛生的な環境を作り、その中で文化的な生活をエンジョイしていたと言う。そのためであろう、日本軍が入ってきたときの歓迎ぶりは、まさに地鳴りがするほどのものだったそうである。やがて日本軍は敗退するが、その後には再びオランダ軍が戻ってきた。人々はこのオランダ軍と戦ってインドネシアの独立を勝ち取るのである。

このような実情は、アジア、アフリカ全体に共通する傾向だったに違いない。しかし、いかに過酷に支配されようと、これら植民地に抵抗らしい抵抗は存在しなかった。「白人はアジア人など猿と同じだと考えている」と小学校時代に教わったが、真相はこれに近いものだったのではないだろうか。

その無力なアジアの一角に、白人の心胆を寒からしめる「抵抗勢力」が出現した。日本は開戦劈頭（へきとう）、ハワイを急襲して米太平洋艦隊を撃滅し、イギリスの不沈艦プリン

ス・オブ・ウェールズを撃沈した。

日本のと戦いに勝利した後、アメリカ占領軍が、この極東の危険国家を、軍事的にだけでなく精神的にも武装解除しようと考えたとしても不思議はない。そこから、占領軍による我が国の伝統文化への全面否定が開始された。家政学や家庭科における、父や母を敵とするかのような気負いも、この延長上に位置づけられるものなのである。

親の老後は老人施設に丸投げする時代

親、とりわけ父親を民主主義の敵と見る戦後思想は、学校からも家庭からも「親孝行」という言葉を放逐した。学習指導要領のどこをひっくり返してみても「孝」という言葉は出てこない。そのためであろう、今や我が国の家庭は、子育てのためだけの場になってしまっている。父母は限りない愛情を持って子を慈しむが、子は育ち上がってしまうと、親との同居を望まない。親が、起居がままならぬようになって、同居して面倒を見るというようなケースは少ない。よくしたもので、親の方でも「私たちは自分たちでしっかりやっていくから、一緒に暮らしてくれなくてもよい。あなたたちは自分のことだけをしっかりやりなさい」などと、我が子が幼い頃から語り聞かせたりしている。結局、親の老後は、老人ホームなどの施設に丸投げされてしまうのである。

だが老人ホームなどの施設は、必ずしも老人の幸せを保障できるものでないらしい。他人が老人のお世話をするには限りがある。例えば、日に何度も粗相を繰り返すような老人に対して、他人である施設の勤務員が、果たしてどこまで親身にそのお世話をすることができるのであろうか。施設内の温度一つにしても、寝込んでいる老人と働いている勤務員とでは適温の水準に違いがある。又、人間は常に他人からの愛や信頼や尊敬を貪婪（どんらん）に求める生き物である。老人介護施設にそれを求めることは難しだろう。

もちろん、親身も及ばぬまごころで介護に当たっている方も少なくはないだろうが、親の面倒を見る第一の責任は、その子どもにある。少子化の今日、それは困難な課題かも知れぬが、子はその責任を自覚し、まごころを込めて親の老後の面倒を見なくてはならない。介護に疲れ、弓折れた矢尽きたとき、そのようなときに初めて頼るべきものが老人介護施設だと私は思うのである。

親子三世代が同居している家もある。そのような家庭にあっては、老人は若者の若さ、幼さに触れて、日々安らぎを得るであろう。又、若者は、老人の熟成した智恵に学ぶことができる。「それはお父さん、お母さんだけでは決められません。お爺ちゃんに伺ってみましょう」「そのことはお母さんにも分かりません。お婆ちゃんに教えていただきましょう」そのような人間関係があつてこそ、家庭は、人がその全生涯を託すことのできる安心の場となるのである。

子どももやがては年老いる

人は、誰しも年老い衰える。醜くもなっていく。それは我々の愛しい子どもたちとて例外ではない。やがて彼らも年老いていく。体力も衰え、気も弱くなった頃に、彼らがその子に――我々からいえば孫の世代に――見捨てられて寂しい晩年を過ごすことになるかもしれ

ぬことを、我々は忘れてはならぬ。それは我々にとり耐え難いことだが、そのとき、彼らの幸せを自分の命よりも大切に思っている我々は、もうこの世にはいないのである。

やはり、その子ども、次の子どもというふうに、人が安心してよりどころをできるような家庭が形成される社会的循環を、我々は準備しておかなければならない。それこそが「孝」の教育にほかならないのである。

孝は人間形成の大前提

アメリカの二十世紀前半を代表する教育学者ジョン・デューイは、「子どもは教育の主体であって客体ではない」と言っている。決して間違った考えではない。だがここで忘れてならないのは、発達段階という問題である。人は生まれた瞬間から人間なのではない。放置しておいて、ひとりで人間に育ち上がっていくものでもない。我々はすべて、周囲を取り巻く多くの方々の力によって、「人間にさせていただいた」のである。人間に”なった”のではない。”させていただいた”のだ。

戦後は、「倫理規範は教えてはならぬ。それは子ども自身が内面形成していくものだ」というような考え方が支配的であった。デューイに傾倒するあまり、発達段階という発想が欠落してしまったのである。そのような人々に私は尋ねる。乳飲み子は、いかにして教育の主体たり得るのかと。

小学生も三年生になるくらいまでは、親や保護者を絶対の存在と考える。先生にさえよく思われれば、仲間からはなんと思われようと構わないというのがこのころである。そのような時期には「殺すな」「盗むな」「嘘をつくな」をいうような根本的価値をたたき込んでおかなくてならない。服従の大切さを教えていかねばならないのもこのころである。

「教育勅語」が、国民のあるべき姿を示す徳目の冒頭を「父母に孝に」という言葉で飾ったのも、この消息を深く意識したからにはほかならない。孝を最高の徳と心得、親の教えに忠実に従っていこうとする人間であって初めて、親の教えに素直に、忠実に従い、深みのある人間性を養うことができる。

戦後思想は、親孝行を”親を大切にすることだ”と考えがちであった。「親への孝を教えるのは、親の利己心を子どもに押しつけることだ」と考えがちだったのである。しかし、親を敬い、親を大切にすると心が育っていなければ、子は、人間として健全な成長を遂げることができない。

師への尊敬も同様である。その尊敬によって利益を受けるのを潔しとしない傾向が、今日の学校には溢れている。卒業の際の「謝恩会」に違和感を抱き、これを「卒業を祝う会」としなければ納得できないなどという傾向も、この流れに属するものである。

しかし親への孝養は、子が親を大切にするという責任を果たすだけでなく、子が人間として健全に育っていくための絶対的前提でもあったのである。まさに「孝は百行の本」であることを忘れてはならない。

取り戻さねばならぬ世代と世代の一体感

奥多摩の山などで、樹齢数百年の檜の林を見かけることがある。私は言いしれぬ感動を覚

える。この檜は、それを植えた人々に直接の恩恵をもたらすものでは決してなかった。彼らは、まだ見ぬ数百年後の世代のために、額に汗して苗木を植え付けてくれたのである。植林が「家」の制度によって守られてきた事実も否定できない。人はやがて死ぬが、「家」は永遠に生き続ける。家との一体感を持つことによって人々は、限りある人生を永遠に生き続けることができたのである。

親の老後を施設に丸投げするような時代風潮にあって、このような世代間の一体感は完全に破壊されてしまった。中にはわが子に財産を承継させたくないとする老人も少なくない。ろくに親の面倒を見ないようなわが子に残す必要がないと考えるからか、資産を当てもなく蕩尽（とうじん）する傾向さえ絶無ではない。

昔は、親の養育はこの責任とされた。それはある種の社会保障制度でもあった。今そのすべてが、年金をいう形で完全に「社会化」されてしまっている。しかし、次世代が前の世代を養育しなければならないという意味で、その本質には変わりはない。親の養育の第一の責任は子にあるものとし、これを補完するものとして社会保障を位置づけるのが本来の姿だと思うのである。間違っているだろうか。

学校は親孝行の教育を

今日の学校教育では、親孝行は尊敬や感謝などの価値に一般化されてしまっている。むしろどちらかといえば、親孝行は人権の平等を否定するものであるかのごとく敵視されがちである。しかし親孝行は、我が国にあっては国民道義の根底をなす価値であった。アメリカ占領軍は、わが国に対する思想的武装解除の一環として、伝統文化の全面否定を強要したが、その中で親孝行は特に強く否定されたものの一つである。戦後もすでに六十年を過ぎた。いつまでもこのような思想的強要を引きずってはいはなるまい。

（心の生涯学習誌 玲瓏 れいろう平成18年3月号掲載）

（特集 孝心を育てる一孝は百行の本一）